



原田牧場
Note

Page 9

原 田 希

先日 祖母が亡くなり、祖母の生前の言葉を思い出すことが増えました。「お母さんが早くに亡くなったあんたらが可哀想やったから、母親みたいに教育は出来ないけど、食べる事だけは困らんようにしたつもり」と言っていたとおり、祖母の言葉は、教育さておきのストレートパンチでした。思ったそのまんま。なぜにそんなことを言う？ナンバー1は「あんたは結婚できひんわ、そんなにひどい顔（アトピー）なんやから」でした。

知ってるし。そんなんわざわざ追い討ちかけて言う必要ある？ イラッとしてまた悪化しそうでした。まあでも、祖母世代の感覚としては真実（器量よしならずぐ結婚できて苦労はしない）なんやろうな。別に結婚は目標にしてないけど、見た目マイナスの分、内面の良さ、能力（技術）、笑顔（笑）を育てて、自信をつけないとひとりで生きてもいけないなあ。仕事もやらなあかんし、これは大変やなあ。と社会人になったばかり、はたちの私は考えました。もし母が生きていたら何と言っただろう？と想像してみます。

「こんな風に産んでごめんね」と言ったかもしれない。「充実した日々を送っていれば自然に治ってくるよ」「見た目は関係ないよ、希ちゃんのいいところを伸ばそう」と優しい言葉で励ましてくれたかもしれない。けど、どうなんかな？ 気休め言うてもなあ。

（想像の母に失礼（笑）） それに比べて、正味しかない祖母の言葉は、ストレートに突き刺さり傷付きもするが、間違いなく私を奮立たせる。家族にひとり、こういう人が必要なんだな、とあってからは、牧場家族にも正味で接しています。

結婚できない、と言われていた私ですが、正味を話して、それでもいいよ！と言ってくれた夫と結婚しました。難儀な体質が遺伝すると思うと耐えられないので、子どもは産まない選択を希望している。けれど、仕事は熱心にやるし牧場は今まで以上に盛り上げるよ、と。女性の役割は子どもを産むだけじゃないと一番わかっている自分が気にしているのはやはり子どものこと、夫の曾祖父が開墾した牧場の先ゆきを思い、全部を話してから、と思いました。恐らく…単純に牧場に人手が欲しかった夫は、いいよ！と即答したんだと思いますが、ずっとひとりで背負ってきた荷物をホイッと持ち上げてもらった気持ちになりました。

田舎は地域の子どもたちをみんなで見守る意識が高い（楽しみにしている）ので産まない。と言うと、なんで？と言われる。子どもは？とたびたび聞かれます。牛になぞらえて、産まなかったら廃用だぞ、と悪い冗談を言う農家のおやじもいます。近いうちに使うでしょう？と余った排卵検査薬を親切でくれた若妻仲間もいました。悪気はなく、みんな子どもを楽しみにしてるんだなあ。と思います。世の中の「たいてい」からはずれると、説明が大変だなと思いますが、いやな気持ちにはなりません。

自分に子どもはいなくても、地域として子どもの食育を考えたり、基幹産業である酪農と環境をどう残していくか？を考えて実行します。月一で全戸に配布される役場だよりは、小学校、中学校、高校、それぞれのお便りが入っています。今月の行事、先月の授業の様子、地域の人なら誰でも参加していい参観日もあります。地域の文化祭には子どもたち全員の作品が並びます。こんな地域だから私も子育てのはしっこに寄り添わせてもらえています。

夫とは、実質的な子育てはない代わりに、酪農や地域に根付いてくれる人の面倒をみていこう、と話しています。特に道外から来てくれる単身者、私たちとは親子ほど離れている二十代の女性たちです。仕事とは別に、ちょっと愚痴をこぼせたり、ときどき夕食を一緒に食べて団欒する場所としてコミュニケーションアパートなるものを建て、単なる大家さんをやっています。家庭菜園でとれたものを配布したり、バーベキューをしたり。仕事の際はクールな私の別の顔、大阪のおばちゃんを發揮する場です。このアパートと大阪のおばちゃん力の話はまたいずれ。

そんなことで、祖母からくらった痛いストレートパンチからなんとか奮い立ち、誰とも比べない自分の道、内なる充足感を感じるようになれたこの頃ですが、身内の衝撃的な言葉というのはいつまでも胸に残り、良くも悪くも作用すると思います。他人の言うことならば、私の事をよく知らないくせに、と気にも止めないことでも、身内となれば違う。今となっては、祖母の言葉の意味を聞くこともできませんし、聞いたところで、そんなん言っただけ？ 忘れたわ、と悪びれもしない気がします。言葉を投げる方はそんなもん。受け取る側が自分のいいように意識したら生きやすいと思います。

晩年、祖母は「長生きはいいけど、まわりの人がどんどんいなくなるのは寂しいわ。あんたも遠いところにいるし。実家で一緒におってくれたらなあ、と思うわ。でもこれはただの愚痴やで。ほんまにそばに居てほしいなんてこれっぽっちも思っへんよ、北海道でいいように暮らしてるやから。ただ愚痴が出るだけ。」と言っていました。

「あんたは結婚できひんわ、そんなにひどい顔（アトピー）なんやから」という暴言も、いつまでもそばにいたらいいよ、と意識してみます。

ほら、おばあちゃんに抱きつきたくなくなってきますね！

筆者 原田 希 ハラダ ノゾミ 1973年 大阪府吹田市生まれ
2006年 酪農家との結婚を機に北海道へ移住 自身も酪農家に
2017年 北海道農業士に認定 北海道指導農業士の夫とともに、
新規就農者支援や女性農業者向け勉強会のお世話係担当